



TITLE:

ニホンザルの行動発達：特にアカンボ期のける母子の伝達行動の発達を中心にして(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

川辺, 寿美子

CITATION:

川辺, 寿美子. ニホンザルの行動発達：特にアカンボ期のける母子の伝達行動の発達を中心にして(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1973, 2: 41-41

ISSUE DATE:

1973-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162448>

RIGHT:

とA反応についての規則性がはっきりしているのに対して、嵐山A群では年令差の1才の姉妹間のみで一定の傾向がみられ、その他の姉妹間および母子間にはそれがみえない。このことは次に述べるような嵐山群と宮島群との社会構造上のちがいと関係しているかも知れない。Koyama (1967) の調べた嵐山群の母娘間および姉妹間の順位関係は、それぞれ母、妹が高位となっている。しかし宮島群のそれは、半数近くの例で、娘、および姉の方が高順位であった。しかも順位のはっきりしている個体間の antagonistic behavior のさいに、一方的攻撃ではない、優劣のはっきりしない行動がよくみられた。嵐山A群とくらべて、このような宮島群の順位関係のルーズな社会秩序のちがいが群れ間の status personality のちがいに関係しているかも知れない。これは今後の問題としたい。

引用文献

- Itani, J. (1957): Personality of Japanese monkeys. *Iden*, 11 (1): 23-29. (In Japanese)
- Koyama, N. (1967): On dominance rank and kinship of a wild Japanese monkey troop in Arashiyama. *Primates* 8: 189-216.
- Norikoshi, K. (1971): Test to determine the responsiveness of free-ranging Japanese monkeys in food-getting situations. *Primates* 12 (2): 113-124.

ニホンザルの行動発達

一特にアカンボ期における母-子の伝達行動の発達を中心にして

○ 川辺寿美子 (大阪市大・理・生物)

ニホンザルの社会構造について解明をすすめていくと、その社会を構成する個体のありかた、すなわち個性につき当る。何がその個体を作りあげているかを解明するためには、その遺伝的要因、後天的な環境要因についての分析が必要となる。このような見地から、出生直後のアカンボの隔離実験及び、自然群の中でのアカンボの発達を中心にして研究してきたが、今回は環境要因の中で、もっとも影響力の強い母親のコドモに対する行動、母-子関係を中心に、特に、伝達行動を中心に調べてゆきたい。

目 的

これまで研究してきた、隔離飼育や自然群でのアカンボの行動発達で得た資料をもとに、あらかじめ、行動のタイプわけを行ない、それにもとづいて、二対の母-子関係の一定の時間内での記録をおこなう。口述記録と同

時にメモーション撮影装置で記録をとり、将来、コーディングができるようにしたい。

方 法

観察する行動は、主として母-子間の距離を指標とする。距離関係を5段階に分類する。即ち、1. 母-子が腹部と腹部を合わせている。2. 片手をかける程度に接近している。3. 母の膝の周囲にいて、手の届くところにいる。4. 身体の接触は全くなく少し離れている程度。5. かなり離れた距離にいる。コードの際は常に actor を主部に、述部に距離関係を入れ、目的格には受け手のサルが入る。このコードの後に、つづけて、その際観察された行動を記録。2対の母子 pair A-A' (infant), pair B-B', 組合せ6通り (A-A', B-B', A-B, A'-B, A-B', A'-B') を1日1回、1回の観察時間は15分間、1週間を単位とし、各対が6回の観察時のすべてにわたるように、順序配合する。観察室は前面320cm、奥行240cm、高さ240cmの広さのグループケージで、前面は透明アクリル板のため、動物の行動はカメラにすべて収めることができる。観察者は、別室で、動物に気づかれないで観察することが可能であった。

被 験 体

2対のタイワンザルの母-子 (*Macaca cyclopis*)。pair Aの母 (初産)、子'71・5・12 生 (♂)
pair Bの母 (初産でない)、子'71・6・13 生 (♀)
この2頭の母ザルはいずれも、屋外グループ・ケージに、8頭の台湾ザルと共にグループを作っていた。

〔川辺氏が、研究半ばにして、お亡くなりになったため、結果と考察は未整理である。貴重なデータの分析の結果は、当初の目的に従って所内対応者により、まとめることを計画している。(渡辺允子)〕

ニホンザルの社会行動と社会構造

✓ 森 明雄 (京大・理・自然人類)

2頭のニホンザルが出会った時に交される種々の行動を調べた。このことによって、ニホンザルにおける近距離伝達行動の解析を行なってきた。またこのように個体の出会いという個体間関係を通して、社会構造をとらえようとした。

1) 今回の調査は、とくにグルーミング行動に伴う音声と記号的行動の解析に重点をおいた。伊谷によるニホンザルの音声伝達の研究では、ニホンザルでは muttering に相当する音声は2種類しかなく、貧弱であるとされている。しかし イ) グルーミング行動には<ゴ・ゴ><ウッガ・ガ><ギュー・ギュー><グ・グ><ク・ク>といった1群の音声に伴う。ロ) これらの音声は、